
運命ですから！

赤兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命ですから！

【Nコード】

N6731I

【作者名】

赤兎

【あらすじ】

一人の彼氏募集中の女の子と最強の高校生こと主人公が出会いそこから色んな女の子が主人公の前にあらわれてくる。

主人公は誰を選ぶのか！

そんなお話。

日常（前書き）

はじめまして赤兎です。

書くの初めてなので、まあー暖かく見守って下さいませ。

日常

私こと、はかなし儚詩 れいか鈴華は今、神社に来ている。

なぜそんな所に来ているかというと…実は16年間、彼氏と言うものをつくったことが無いんで神様にお願いしに来てみたのだ！

「どうか神様、私に運命の出会いと潤いを与えてください!!」

シーン…

噛んじやった。

「さすがに無理ですよねー…」

何とも虚しい私。

温もりをよこせ!!私に太陽をよこせ!優しい人が欲しい!

ああ、帰ろう。

それから家に着くまでに結局出会いはなかった。

「チクシヨー!」

家の前で叫ぶ私。

そして何なんだろうかと見ている近所おばちゃん。

何だか急に恥ずかしくなって家の中に逃げるかのように入ってしまった。

「あーあ、上手くいかないなー」

そしてこの日は何もなく終わっていった。

主人公視点

「あー、だるい」

何だか急にだるくなった。

まるで誰かに呪われているかのような悪寒と急激なだるさが体を支配する。

この何ともやる気のなさそうな奴ことくらかみ倉上 神しんは、なにを隠そう主人公である。

「やばいな」

町を一人歩きながらぼやく。

周りを歩く人達はそんなことも気にすることなく過ぎさり、自分の生活をしている。

だが…そんな中には話かけてくる人もいる。

「おい！倉上、今日こそテメエを潰してやんよ」

目の前には10人くらいの不良が立っている。

その中のリーダーらしき奴はモヒカンを整えながら近づいてくる。

今時モヒカンを見ることはそんなにないし、貴重な存在だと言える。

「あー、イカしたモヒカンをお持ちで…」

神は何となく言ってみた。

本当は今時珍しいなと言つつもりだったのだが…まあ本人はカッコイイと思っているだろうから、あえてあまり貶すことは言わなかった。

「そんなことはどうでもいいんだよ、ちょっと面貸せ」

まあ、こんなことを言っではいるが、少し照れながら言われると気持ちが悪い。

「わかった」

そして…現在、商店街の裏道に連れて来られている。

「それで、俺を潰すなら早くかかって来いよ」

ちよつとだけ挑発すると、モヒカンが前に出てきた。

「まあ話を聞け」

なにか話だすモヒカン。

しょうがないので聞いてみることにした。

「お前…このあいだウチの奴らボコボコにしたよな」

「あー、あつた…かな？」

何かあつたような気はするが覚えてない。

いつものことだけどね…。

「お前…マジ殺してやる！」

モヒカンが突っ込んでくる。

「うゝぜえ！」

叫びながら突っ込んでくるモヒカンに右ストレートをかます。
ドゴン！

打ちこまれた拳は避ける暇も与えず、見事モヒカンの顔面にヒットした。

「ぶぎゅー！」

何かが潰れたかのような声を出しながら遠く離れた壁にぶつかる。

モヒカンはノックアウトしたようだ。

たった一発で壁まで飛ばされたリーダーを見て残っていた不良達は

「人間じゃねえ……」

と神を見ながらばやき我先にと逃げ出してしまった。

「根性がねえ奴等だな、自分の仲間が殺られたつてのに」

一人つぶやき、そのばから去る。

まあ、誰が見ても挑もうとは思わないだろう。

人一人を吹き飛ばす怪物に突っ込んでいく奴に挑んで死にたいやつなんていない。

「帰ろ」

また、町のなかに消えていく神だった。

だがこのとき、運命の齒車が回り出していたことにだれも気がつく者はいなかった。

非日常（前書き）

誤字脱字が多いですがご了承ください。

非日常

次の日の朝のこと。

今、上倉 神は奇怪な状況に遭遇している。

女の子が道端のドブ川に落ちてもがいているという、あまり見ない光景だ。

今このとき、彼女は助けて欲しいだろうが…何せドブ川だ。

あまり気がならないが…

「…しょうがない、助けてやるか」

はあー、とためため息を吐きながら渾身の勇気を振り絞ってドブ川に突入して行く。

そして…少女の前にたどり着く。

「おい、俺の手を掴め」

「??」

彼女は急に声をかけられて放心状態になってしまったようだ。

「??じゃなくて俺の手を掴め」

「えっ、あ、はいっ！」

やっとこさ状況が理解できたらしく、神の手を掴む。

又ルリ。

嫌な又メリが神の手を襲う。

「まあ、しょうがないか」

「？何がですか」

お前の手のドブだよ！、とは言えず、黙って少女を引っ張り上げる。

「とりあえず立てよ、話ならドブ川から出てからでもできる」

「そうですね」

とりあえず立たせてドブ川から上がっていく。

少女もすぐに上がってきたので

「怪我は無いか？」

「ないです」

「ならいい、俺は帰る」

とつとと帰ることにした…のだが。

「ちょっと待って下さい」

止められてしまった。

「なんだよ、せっかくの日曜日で学校ないんだから早く家に帰ってシャワー浴びてどっか行きたいんだけど」

気まぐれで助けたのは失敗だったかな〜と思ってしまった。

「すみませんすみません、でも、お礼をしてないのでなにかさせて下さい」

「いや、いらん」

申し訳ないがお礼など欲しくて助けたわけではない。

「いえ、貰って頂きます！、私を」

すまんが顔がドブで隠れてどんな顔をしているのか分からないし初対面の人と付き合う気が俺にはないのではっきり言ってみた。

「いらない」

「あー、私振られた？」

「ああ」

暫しの沈黙の後。

「俺は帰る」

とりあえず帰ることにした。

「逃がしません！」

「は？」

突然走ってくるドブ女。

逃げ出す神。

「なんなんだあの女、いきなり告白してきたかと思えば今度は追いかけてきやがった！」

全力で走って逃るがついてくる。

振り向いてみるとそこには…

「ひいっ！妖怪ドブ女！」

うおおおおっ！

奇声を発しながら近づいて来ている。

その姿はもはや人とは思えない。

手を前に突き出し、髪の毛からはドブが滴たっているのだから怖

い。

「夢に出そうだ…」

恐怖に身が震える。

早く逃げ切らなくては食われると本能が告げてくる。

「マツテクダサイ」

恐怖からか奴の言葉がおかし様な気がする。

ガシッ！

「ツカマエマシタ」

逃亡の末、俺は捕まった。

奴はメル友！（前書き）

非日常の続きです。

短く載せいきますので更新は早く出来ると思います。

どうぞよろしく。

奴はメル友！

今このとき、俺は妖怪ドブ女に捕まっている。

「すみません、離して下さい」

「いやです！」

何がしたいのかわからないが、俺を捕まえたことに満足したよう
でニコニコしている…ような気がする。

顔がドブまみれで表情が良く分からないのだが…そんな気がする。

「いや、放してくれマジで、逃げないから」

又メリけのある手を放して欲しくて必死に訴える。

「ホントに逃げませんか？」

「あー、たぶん」

「たぶん？」

ヤバイ、放してくれないかも、今の発言。

しょうがない、言い直しておこつ。

「逃げません…」

言いながら彼女の顔を伺う。

だが…ドブまみれでよくわからなかった。

「まあいいです、逃げないなら」

手を放してくれたのでホットする。

「で、さっき俺は君を振ったはずだが…なんでついてくるんだ？」

「いやゝいきなり告白してもだめだなゝと気づいてまずはメル友になってもらうことにしたので、でも言う前に逃げられたので何か追いかけていました！」

何かとんでもない女の子に好かれてしまったようだ。

まあ、メールアドレスくらいならいいか、と思って教える。

「了解、ほれ、アドレス…って、ドブまみれの手で触るな！」

ドブまみれの手が神の携帯を掴もうとする。

「いいじゃないですか…さっき逃げた罰ですよ！」

彼女は逆に切れた。

そして…その一言で黙ってしまった。

「わかったよ。もう勝手にしてくれ」

そう言うのがやっとだった。

そして…携帯はドブまみれとなり、今や綺麗なボディーは汚い黒！、となってしまうた。

「はいっ！終わりました、これでまずはメル友ですね！」

「そうですね…」

正直、最悪の気分だ。

携帯は今や綺麗だったころの名残すらないのだから気分だって沈む。

「とりあえず今日は帰ることにしましょう、お疲れさまでした」

我先にと帰る変態の背中を見ながら一つの決意をした。

「ぜったいにお前とは付き合わねー！」

決意を叫び、自分も家に帰ることにした。

やつらは最強（前書き）

少し更新が遅れて申し訳ないのです。

やつらは最強

あれから家に帰ってまずはシャワーを浴びた。

すっきりして風呂から出ると、見たくもない現実が待っていた。

「携帯…綺麗にしなければ！」

そう、今現在、携帯はドブまみれとかしている。

「いや、待て、自分よ、買い換える方が早くないか？」

そして今日の予定が決まった。

「携帯…買い換えに行くか」

一人つぶやいていると後ろから声が聞こえてくる。

「お兄ちゃん、さっきから呼んでるのになんで返事しないの！」

「聞こえてなかったんだよ」

ヤバイ、こいつには捕まりたくなかったんだが…どうしようか。

「わかった、まあそれはいいんだけどねお兄ちゃん、今日デートしよ」

「馬鹿じゃないのお前…なんで休日に妹とデートせにやならん」

妹こと倉上^{くらかみ} 藍音^{あいね}は実はホントは兄妹ではなかった。

妹は養子で家に来たから血は繋がっていない。

それと、家の親は妹が「お兄ちゃんと結婚したい！」と言ったとき「よし、式の費用は出してやる」と言いやがった。

そんな話をした次の日には本気で式の準備を始めたのだから最悪だ。

そして…妹も本気になっていた。

止めなければ本気で危なかった。

法律では入籍出来ない年だが…あの親たちにそんなものは通用しない。

なぜなら、家の親は世界最強の四人の内の二人だからだ。

後の二人はもう死んでいるらしい。

この世界最強の称号は策士と戦士に分かれていて策士は経済や法律をすべて支配できる。

そして…戦士はこの世界の軍隊を動かすことができ、戦争はどの国も独断では起こすことは出来ない。

そんな人だから法律なんていつも無視して生きている。

立場的にそれが可能なのだ。

「いいじゃないの、将来結婚するんだからデートくらいしてよ!」

この妹がこんなことばかり言うから家の親は暴走するのだ。

「わかった、行くよ...」

「やった!」

「だけど、まずは携帯買い換えに行くからな」

「はい!」

そして...俺は妹とデートに行く事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6731i/>

運命ですから！

2010年12月14日20時53分発行